

Essay

Sapiarc.com

2014年10月3日(2014-6)

結婚 50 周年の日に

今日で結婚式を挙げてからちょうど 50 年になる。50 年という長い年月のようだが、過ぎてしまうと、長かったとは感じない。しかし、決して短かったわけでもない。当時は、東海道新幹線が開業したばかりで、1 週間後には東京オリンピックを控えており、世の中は明るい雰囲気にも包まれていた。実際、その後、日本の経済は高度成長を遂げた。1964 年 10 月 3 日は快晴で、暑いぐらいの日だったが、今日も晴れて気温は 30°C 近くまで上がった。これは、天候がお祝いをしてくれているようで、私には気持ちが良い。

そのころ、私は 50 年という遠い将来のことは考えたこともなかった。私は東大理学部化学科の助手だったが、翌年にはミシガン大学の、翌々年にはミラノ工科大学の博士研究員になることがほとんど確実にっており、将来への期待とともに一抹の懸念も感じていた。その後、それらの期待と懸念を実際に経験することになるのだが、結婚したときには、そんなことがわかるはずもなかった。1965 年から 67 年までの、アメリカ 1 年、イタリア 1 年の生活は、私には決定的な影響を与えたと思う。日常生活での考え方や身の処し方に、何となく日本のやり方とは違ったものが入ってきたようだ。

学部学生のと看から起算すると、50 年以上大学に関係していたわけだが、2008 年 3 月で埼玉大学長の職を退いて以来、フリーな立場にある。後で述べるように、専門に関係のある本の編集、出版を仕事のようにして来たので、暇だったわけではない。一方で、身体は着

実に進んでいる。これは自分自身感じているのだが、同年代の人たちの状況を見ると、より具体的にわかる。人が確実に齢をとっていくのを見ると、人から見ると、自分もそう見えているのだらうと思う。しかし、頭の方はまだ余り衰えたという感じはしない。むしろ、元よりも物事の裏まで見通す力は増えているように思う。若いときには、そういう力はなかった。残念ながら、そういう能力が増えても、今では使い道がない。

結局、まだ使える力を何に使えば良いかということになるが、これまでの数年間には、「赤外分光測定法」をエス・ティ・ジャパンから 2012 年 4 月に出版し、その英文版に相当する “Introduction to Experimental Infrared Spectroscopy: Fundamentals and Practical Methods” を今月英国の Wiley 社から出版することになっている。これらの本は、私が編集し、一部を書いたものだが、後者は、ほとんど全部私が英文にしたものだ。これは予想以上に面倒な作業で、そのために、元からあった腰の問題が顕在化してくるなど、老化現象を速めたような気がする。そういうマイナスの問題も出てくるが、この本と対をなすものをもう 1 冊書くつもりである。その本の題目は “Analysis of Infrared and Raman Spectra : Fundamentals and Modern Computational Methods” とすることになっていて、これも Wiley 社から出版する予定である。本を書くこと、とくに英文で書くということは、体力を消耗するものだ。そういう意味では、シニア世代向きとはいえない。

しかし、この本を書くことは、私にとってひとつの使命だと感じているので、万難を排して、やってしまいたいと思っている。

本に関することは、結婚 50 周年とは直接関係のあることではないが、たまたま第 1 冊目の英文本の実物が一昨日私に届いたので、タイミングとしては、これも 50 周年の記念品になった。それは良かったと思っている。（おわり）

